

第1回 『即身成仏義』のキーワード

弘法大師空海は『即身成仏義』を撰述し、真言密教の中心教理の一つである「即身成仏」の思想を説いた。この『即身成仏義』は、「即身成仏」の典拠を示した二経一論八箇の証文、即身成仏頌、そしてその頌の解説から成る。

即身成仏頌とは、

第一頌	第一句	ろくだいむげにしてつねにゆが	體
	第二句	ししゅまんだのおのおのはなれ	相
	第三句	さんみつつかじそくしつあら	用
	第四句	じゅうじゅうたいもうそくしん	無礙諸佛
第二頌	第一句	ほうねんさはんにかぐそく	法佛成佛
	第二句	しんすうしんおうせつじんす	無數
	第三句	おのおのごちおさいち	輪圓
	第四句	えんきょうりきゆえじつかくち	申す所の此の四句は成佛の二字を明かす。

の二頌八句である。

第一頌は六大・四曼・三密を体・相・用に配した三大説と第四句の比喻からなり、この頌において「即身」を定義しているのである。また第二頌では「成仏」を「円鏡力の故に実覚智なり」と説き、成仏とは「真理を覚ること」と定義しているのである。

【註】 『即身成仏義』が説く「成仏」の解釈について

『即身成仏義』の即身成仏頌の第二頌の四句は「即身—成仏」の「成仏」を明かしている。以下に、「成仏」の頌の概要を記す。

第二頌の第一句「法然に薩般若を具足して」の薩般若(さはんにゃ)とは一切智智(いっさいいち)である。そして、この一切智智とは真理、即ち大日如来である。つまり、第一頌で六大や四種曼荼羅で説いた「真理」を「智」のレベルで表現したものが一切智智である。本来衆生はこの真理を生まれながらにして具えているが、自らがそのことを覚りもせず意識もしていない。そのために、仏は理趣(真理の趣き)を説き、衆生にその真理を覚らせようとするのである。

続く第二句「心數心王刹塵に過ぎたり」と第三句「各五智無際智を具して」は、一切智智を「智と心と法門」という三つの概念で把握した上で、これらの概念は衆生から離れたものではなく、本来的に衆生が具えている智慧であるとしている。更に、顕教では一切智智を「すべてを知るひとつの智慧」と捉えているのに対して、密教では無数に存在するすべての人々(衆生)の智慧の集合体と捉えるのである。つまり、密教においては、「智」のレベルで捉えた「多様不二」が一切智智であると空海は説いているのである。

第四句「圓鏡力の故に實覚智なり。」は、成仏に対する理由(所由)を示している。如来が「覚ったもの(覚智)」と称されるのは、高い台の鏡の中にはすべてのもの(色像)が映し出されるように、如来の心の鏡も同様にすべてのものを映し出しているからである。このことが示すように、実在のすべて(真理)を映し出す鏡に例えた智慧の力(円鏡力)により達成される意識レベルが、真実を覚ること(実覚智)なのである。従って、成仏とは真理を覚ることにほかならないのである。

また、この成仏の頌は「成仏とは何か」ということを説くと同時に、一見「主客の対立」が存在するように見える如来と衆生の関係に対して、実は一切智智という視点からも「如来=衆生」であることを併せて説いているのである。

故に、「即身」とは、成仏すべき真理であり、『即身成仏義』に説かれる「即身成仏」とは、「即身」なる「真理」を「覚ること」を意味するのである。仮に仏を「覚りを得たもの」と解釈したとしても、「この身このままで仏と成ること」との解釈は、浅略なる戯論に他ならないのである。では、「即身」とは何を意味しているのだろうか。

『即身成仏義』には、「是の如くの六大法界體性所成の身は、無障無礙にして互相に渉入し相應せり。」のような状態や作用を意味する語句が頻出する。主な語句に、「自在」、「無障」、「能生」、「所生」、「不離」、「瑜伽」、「無礙」、「相應」、「渉入」、「加持」、「速疾」、「微細」、「平等」、「圓融」が挙げられ、これらの文字数は全体の約4%にも上る。また、「相應渉入」、「渉入相應」、「圓融無礙」はそれぞれ1回、「重重帝網」は3回用いられているが、これらの語句は、『即身成仏義』を読み解く上での重要なキーワードと考える。

【註】『即身成仏義』のキーワード

それぞれの語句が記されている回数は次の通り。尚、()内は、「即身」の説明に用いられている箇所と回数を示す。「自在」は5回(内 六大解説に4回)、「無障」は六大解説に2回、「能生」は六大解説に6回、「所生」は5回(内 六大解説に4回)、「不離」は8回(内 六大解説に1回、四曼解説に5回)、「瑜伽」は5回(内 六大解説に2回、四曼解説に1回、三密解説に1回)、「無礙」は13回(内 六大解説に6回、四曼解説に1回、無礙解説に2回)、「相應」は6回(内 六大解説に3回、三密解説に2回)、「渉入」は4回(内 六大解説に3回、無礙解説に1回)、「加持」は10回(内 三密解説に9回)、「速疾」は6回(内 三密解説に5回)、「微細」は三密解説に1回、「平等」は7回(内 三密解説に4回、無礙解説に3回)、「圓融」は無礙解説に1回。

更に『即身成仏義』には、一般には対立すると考え得る概念に対して、その本質は同等であるとする「色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。」、「四種曼荼羅と四種智印は其の數無量なり。一一の量、虚空に同なり。」、「三法は平等平等にして一なり。一にして無量なり。無量にして一なり。而も終に雜亂せざる」など、「而二不二」や「多様不二」をも連想し得る記述が多く見られる。中でも「一にして無量なり。無量にして一なり。」は、「多様不二」と解釈しても間違いはなからう。

【註】多様不二とは

中村元『佛教語大辞典』下巻、p.1171によると、「不二」とは、「同体。二つのものの対立のないこと。二つのものの平等。」等を意味する。従って、「多様不二」とは、「多様なものの同体。多様なものの対立のないこと。多様なものの平等。」と解することができる。

また、生井智紹「曼荼羅と多様不二の論理」、p.23-24によると、インド思想史において、多様不二には「シャンカラの多様不二」と「ダルマキールティの多様不二」という二つの視点があるとされる。前者は本源と疎外態としての個の最も典型的な思想的体系化の完成態(ブラフマンとアートマンは同一のものとする梵我一如)、後者は認識内容に関するものである。生井は、曼荼羅というイメージ、もしくは本有あるいは当為の宇宙構造モデルが、多様であり不二であることが、現代密教徒にとっても重大課題であると指摘している。曼荼羅は、その母型構造(matrix)に確固とした普遍の構造があるからこそ、地域時代的領域に、多様に変移し生きてきたのであると論じている。このことから、筆者は普遍の母型構造を如来の三昧耶身である六大と捉え、この構造内の「多様であり不二であること」を多様不二と捉えた。

しかし、このまま『即身成仏義』の中のみで「相應渉入」や「重重帝網」や「多様不二」等を解釈し論じることに些か疑問を覚えるのである。何故ならば、華嚴の經典や論書等にもこれらの語句や同様の概念を持つ語

句が説かれているからである。

「相応渉入」の類語に、「相即相入」、「相即円融」などがあり、華嚴宗教学においては縁起思想を説いた語句とされている。中村元『佛教語大辞典』によると、「相即相入」は、

「相即とは一と多との関係を述べたもので、一があつてこそ多が成り立ち、また多によって一が考えられるので、一と多とは密接不離であるということ。相入とは一におけるはたらきは全体のはたらきに影響し、全体のはたらきから当然一の働きが考えられるから、これもまた、密接不離であるということ。いかなる物（たとえば机）にもはたらきがあるが、体（そのもの）の方面であらゆるものが一つであるというのが相即、用（はたらき）の方面であらゆる物が一つだというのが相入である。実体を否認すると、あらゆる物が網の目のように互いに入り合うことをいう。具体的個体の存在とは、そのまま全体におけるはたらきになるという世界観である。円融、融通、融即ともいう。」

と説明されており、多様不二の意味を含むとも解せるこの相即相入という語句は、唐の僧で華嚴宗の第三祖の賢首大師法蔵（643-712）の著作である『華嚴五教章』と『華嚴経探玄記』に記されている。法蔵は、華嚴の縁起、即ち法界縁起の様相を「縁起相由」という語句により顕している。これは縁起している事事物物（諸現象）の関係性とその構造を同体・異体の相即・相入という概念によって表現したものである。

また、「重重帝網」の類語に「重重無尽」があるが、中村元『佛教語大辞典』によると、

『華嚴経』金獅子章によると、鏡を十個つくり、中央に蠟燭を置くと、その光が鏡に映る。それがまた他の鏡に映り、複雑に映り合つて幾重にも重なることをいう。互いに関係し合つて際限のないこと。無尽に関係し合っていること。一切万有が相互にいりまじり、相即融合しているさま。」

とされ、この語句も『五教章』等に記されている。

更に、「重重無尽帝網」なる語句もあり、中村元『佛教語大辞典』によると、

「インドラ神の宮殿の珠網が重々にからみ合つて映発することをいう。『華嚴経』の所説であるが、縁起互融していることにたとえる。」

とされ、この語句も『華嚴経探玄記』に記されている。

このように『即身成仏義』のキーワードと目されるこれらの類語は、既に華嚴の教義や根本思想を説くために用いられていたのである。この点について、加藤精一は「異本即身義(計六本)の異本性」において、

「それは空海が凡即是仏の深旨を証明するために、華嚴宗の法界縁起の理論を、『即身成仏義』だけに限つて縦横に応用しているという事実である。『即身義』には無礙、重々帝網、縦横重々、渉入相即など法界縁起の用語が自由に用いられている。華嚴の重々無尽の法界縁起は、一即一切、一切即一であり、無関係に存在しているものにすべて縁起を認め、異なったものをイコールの記号で結びつける、という教えで一見異なったものを等値の記号で結ぶという論理を、空海は、法身大日と衆生という二つの对待する実在に応用し、この両者を等しいという証明に用いたのである。密教独自の用語では瑜伽とか加持とかの語があり、もちろん空海もこれを用いているが、それに加えて華嚴の用語を用いたことで、華嚴を超える密教の立場を顕教の学匠たちに知らしめ、それと同時に、華嚴の法界縁起と密教の即身成仏とは似て非なることをもあわせて知らしめようとしたのである。」

と指摘しており、華嚴では異質と見做されるもの同士を等号（イコールの記号）で結びつけるのに対し、空海は主客の対立があると見られているもの同士を等号で結びつけている点が大きく異なるのである。従つて、こ

れら語句の表層的な意味は等しくとも、空海の真意はまったく異なると解釈できるのである。更に加藤精一は「空海と澄観」において、

「このように真言密教で説く平等の思想は、密教経典にあると同様、華嚴経に於いても重要な思想なのである。ただし華嚴宗の教学ではこの思想を密教のように全面的に押し出しているわけではないし、具体的な修行方法にも説いていないのである。」

と指摘しており、『即身成仏義』における華嚴の言葉の多用が、空海の独創性を損なうものではなく、空海の真意は華嚴とは異なると解釈し得るのである。

従って、「多様不二」と「相応渉入」は、空海が意図した即身を把握するための語句と解釈でき、『即身成仏義』のキーワードと捉えることができるのである。

本論は、「多様不二」と「相応渉入」という『即身成仏義』のキーワードを手掛かりに、「真言密教の宇宙観」を探ろうとするものである。